

発 達

鈴木 隆 男

生まれた子どもがだんだん大きくなって、動作が滑らかになったり、泣いてばかりいたのが、いつのまにか声を出し、言葉を話すようになる。なんでも口に持って行っていたのが、いつのまにか自分の周りにあるものを理解し、やがてそれらの名前を憶え、そして物事を考えるようになる…。

子どもの変化は実によくできていると思えてなりません、このような発達的な変化はどのように定義されているのでしょうか。何事によらず、学問の世界では、述語を学ぶところから勉強は始まります。これはいわば、保育という世界の業界用語のようなものです（述語に関するこのあたりの議論は、“学習”というトピックをご覧ください）。さてここでは発達ということについて考えてみましょう。現行（2018年2月段階）の保育所保育指針は“第2章子どもの発達”の冒頭で次のように述べています（保育所保育指針解説書、2008）。

“子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく。すなわち、子どもの発達は、子どもがそれまでの体験をもとにして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身につけ、新たな能力を獲得していく過程である。”

ここでは誕生後の子どもが育っていく姿を、環境との相互作用という観点で描いています。教科書的にはもう少しカタイ表現を使って、発達を次のように定義します。

“発達”とは、個体が、生得的に持っている遺伝的な要因をもとにして、自らをとりまく環境に働きかけ、環境との間で相互作用を繰り返

すことを通して、心身の構造や機能が、連続的に、また漸進的に分化・統合して、より有能に、より複雑に変化するプロセスをいう。

ここでは、長い間議論の的だった、発達を引き起こす原動力が“遺伝”か“環境”かという論争に終止符を打つ形で、単に遺伝だけで発達が規定されるとか、環境万能だとか言った説から脱却しています。

ところで、近年“生涯発達心理学”という言葉が使われるようになってきました。発達心理学は、学問としての出発点の一つを生物学に置いています。生物学の世界では、たとえば、昆虫の成長を例にとると、受精卵が孵化し、幼虫、蛹と変態を繰り返しながら、成虫になる過程を分析的に研究します。成熟した成虫は交尾したのち産卵し、多くの場合そこで個体としての生命の過程を終えます。このような生物学的なモデルに倣ってきたので、長い間発達は子どもが成長して大人になるまでの変化を丹念に考察することを目指してきました。しかし、工業化されて豊かになった社会では寿命が延び、青年期を終えた後の長い人生の変化に注目する人が増えてきました。このため、大人になった後の変化にも目を向ける形で、生涯発達を考えなくてはならなくなっています。そういう意味では発達という概念を、再検討すべきなのかもしれません。

〈引用・参考文献〉

厚生労働省（編）『保育所保育指針解説書』株式会社フレーベル館、2008。

平山 諭、鈴木隆男（編著）『ライフサイクルからみた発達の基礎』ミネルヴァ書房、2003。